ことわざ漢方考現学１

梁哲周

人口[1]に[2]膾炙(かいしゃ)したことわざを漢方の目で見たらどうなるか,すこし考えてみたい。

風邪は万病の元

『素問・風論』の「風は,百病の長なり,その変化に至りては,すなわち他病となるなり。」あたりが出典であろう。江戸時代の医者が「風は,百病の長なり」といっていたのがいつの間にか,「風は,万病の元」に変わっていったのであろう。

日本では万病といい,「素問」では百病という。白髪三千丈[3]の中国で百で,日本で万とは,話が逆の様な気がするが。

ただ,「素問」の「風邪」は「邪」つまり「風邪」であり,ここでいう「風」は「かぜ」,つまり病名一般感冒ないしインフルエンザである。

邪気の「風邪」は他の邪気と組んで,「風寒」「風湿」「風燥」などとさまざまな疾病をよびやすい。温病など「風熱」「風温」などはその典型である。したがって,確かに万病の元である。

鬼の霍乱

平素やけに丈夫な人が病気になったときによく使うことわざであるが,この霍乱が気にかかる。漢方をやった人ならすぐにわかる病名であるが,一般人にはわからない。

漢方に病名がないなんて,誰が言い始めたのか。『傷寒論』には『辨霍乱病脈証并治』なるおり『傷寒論』にも立派に病名はありますよ。おそらく,漢方を学習して初期のころに記憶する漢方の病名の一つであろう。

清代の末期に,コレラが東アジアに登場してきたときに,これを霍乱に当てたこともあった。しかし,その発病の急激さ,2,3日で死亡することから「三日コロリ」と呼ばれた。急性の胃腸炎を「霍乱」に当てることとなった。

他人の疝気を頭痛に病む

よそ様の病気を心配して頭痛を病んでしまうというたとえである。

ここでも「疝気」という病名が登場する。腹部に激しい痛みを覚え,大小便が不通となるなど。

大塚敬節先生が疝気症候群と名づけて,当帰四逆加呉茱萸生姜湯の証を明らかにしたの

---

[1] 人口（じんこう）人のうわさ。膾$_2$炙人口$_1$ｼﾞﾝｺｳにｶｲｼｬす　詩文や名調子のことばが、人々の間に広く知れわたる。

[2] **膾 炙**（かいしゃ）　１．生肉とあぶった肉。２．人々の口に上りもてはやされること。

[3] **白髪三千丈**（はくはつさんぜんじょう）は、唐代の詩人・李白の五言絶句「秋浦歌」第十五首の冒頭の一句。「**緑愁似箇長**（うれいによりてかくのごとくながし）」と続き、通常、「**積もる愁いに伸びた白髪の長さは、三千丈（約９キロメートル）もあるかのように思われる**」と解釈されているが、日本においては、この一句のみを取り出し、極端な誇張表現の例としたりすることもある。

はあまりにも有名ある。

肝経・胆経にそって冷えと痛みがあり,引きつるように痛む。とくに側頭部の引きつれるような偏頭痛,下腹部の引きつれるような痛みが顕著である。

頂門の一針

急所を鋭く突く厳しい戒めをいう。

頂門は頭の頂,つまり経穴の百会。ここに一本の針を刺すこと。宋代の蘇軾(そしょく)の「荀卿論(じゅんきょうろん)」に見られる。

「驚悸,癲狂,癇,屍厥,耳聾,目不能視,言語塞渋」に,百会は有効であるとされている。どの作用を以って,頂門の一針とするのかは,小生にはわからない。

短気は損気

肝気鬱結の筆者は,常々これを感じている。そのため,まわりにどのくらい迷惑をかけているのかわからない。そして,なによりも自分自身が多く損害をこうむっているのである。

『素問・刺法論』に「肝平を欲すれば,即ち怒るなかれ」とある。それはよく解ってはいるのだが,何しろ当方は人間がよくできていないものだから。

医は仁術

これほど人口に膾炙(かいしゃ)した言葉も無かろう。それだけに,医は算術,などと揶揄[4]されている。

医は仁術とわざわざ言わなければならないような事態が,いつの世にも存在したのであろう。

薬九層倍

これはまた,薬屋さんにはいささか耳のいたいことわざである。そんなことないとすぐに反論がきそうである。薬屋はそんなに儲けはないと。

ところが,これには続きがあって,「医者百倍,坊主まる儲け」と続くのである。なんともすさまじい。

一般大衆が,薬屋・医者・坊主に対してどういう意識を持っているのかこれでよく解る。

酒は百薬の長

文字通り読めば,酒はすべての薬物に勝る,ということになる。

あまり酒を嗜まない筆者から見ると,とても百薬の長とは思えないのだが。

『漢書』にある言葉である。

いま,手元にある『本草備要』には,酒は「厚毒淡利(こうどくたんり),宣行薬勢(せんこうやくせい)」とある。毒性が強く利水作用があり,全身に薬をめぐらせる作用がある,という。

酒の毒性は漢方でも認識されていた。

酒は,しばしば現在でも酒剤として強壮剤あるいは痺証薬として応用されている。これも,全身に薬勢と気血とをめぐらせる作用と利水作用の故であろう。

のむと即座に酒がまわってくる,この全身に薬勢をめぐらす作用は他薬の追従を許さないものがあり,これを百薬の長といったものか。

---

4 揶揄(やゆ)　からかうこと。なぶること。

毒を以って毒を制す

これまた有名な言葉である。毒は本来人体に対して毒性をもった物質を指している。言い換えれば何らかの薬理活性のある物質である。したがって,古くは,薬物の意味で使われている。『素問・五常政大論』に「毒に能る者は厚薬を以ってし,毒に勝たざる者は薄薬を以ってす」とある。

疾病を引き起こすのも毒であれば,これを治癒するのも毒である。

一分の古方学派の金科玉条とする言葉である。

医者の不養生

大工の掘っ立て,紺屋の白袴,髪結いの乱れ髪,専門家が自分の家業はおろそかにすることを揶揄したことわざは多い。これもその一つである。

『素問・平人気象論』に「平人は,病まざるなり。常に病まざるを以って病人を調う,医は病まず。」と治療者の健康を述べている。脈も呼吸もすべて,平人を基準にして測定している。それだけに,医者は健康でなければならない。

売り家と唐様で書く三代目

一般論にはならないが,小生のよく知る漢薬局の話である。初代なかなかに知られた方で立派な店舗を構え有名な漢方薬局であった。二代目は,その苦労を知ってかそれなりによくやっていた。問題は三代目である。小生は二代目の先生とお付き合いがあったので,三代目とは面識があり,勉強会に行くことも勧めた。ところが,彼女は,小生のアドバイスなどは聞き入れもせず,家伝のノートがあるからこれだけで十分だと,一向に耳を貸そうとしなかった。それからしばらくすると,店を閉じてしまった。人事とはいえ,まことに無念の限りである。薬業界の飲み会での噂話が入ってきた。中高年おじさんたちの間を立ち回って,まるでホステスまがいに飛び回っていたそうである。

標題のことわざは,ことわざではなくて,江戸時代の川柳である。川柳にも有名なものがあり,ことわざになったものも少なくない。これも,その一つである。

初代が,遊びもせず,苦労して立派なお店を作り財産も残した。二代目は,初代の苦労を知っているから,やはりそのお店を立派に守っていく。ところが三代目になると,初代の苦労などは一向に知らない。いつのまにか店は駄目になってしまう。

上手になったのは道楽で覚えた書道,唐様(江戸時代に流行した中国風の書風)だけ。その腕で売り家と書いて張り出してある。

ことわざ漢方考現学(2)

梁哲周

病は口より入り禍は口より出づ

中国清代に温病学派が成立してからは,温病は口鼻から体内に侵入するとされている。傷寒が皮毛から体表を犯すのとは異なっている。口鼻から侵入して手の太陰肺経を犯していく。傷寒の足の経絡を侵していくのとは異なっている。

傷寒は皮毛より入り,足の経を伝わり,温病は口鼻より入り,手の経を伝わる。温病学派成立以来の定義である。

禍が口から出るのは言うまでもなかろう。

いつも一言二言多い筆者などは拳拳服膺[5]すべきことわざである。

立てば芍薬座れば牡丹歩く姿は百合の花

漢方入門当初,小太郎の前社長鈴木五郎氏が東京の学術課におられたころに,講演でこの歌を引かれて「これは美人を表現する歌で,ここに登場する芍薬,牡丹,百合はすべて駆瘀血薬であり,これを服むと美人になれる,婦人病には欠かせない薬だ」とおっしゃった記憶がある。

未だにこの解釈の典故がわからないのが残念であるが,典故は鈴木氏としておこう。

あるいは,鈴木氏が大きな影響を受けた横浜市立大学の石原明先生あたりかもしれない。

百人殺さねば良医になれぬ

「三たび肘を折りて良医たるを知る」『春秋左氏伝』,「九たび肘を折りて医となる」『楚辞』。患者さんのことなのか,自身のことなのか,解釈の分かれるところではある。

中国では「三たび肘を折り」,日本のことわざでは,患者を「百人殺さなければ」とずいぶん薄情なことをいっている。

二股膏薬

内股に貼った膏薬のように,あちらについたりこちらについたりすること。

節操のない,主体性のない人間を言う。漢方がブームになると漢方をやり,調剤がトレンドだと調剤をやる,といったようにあちらこちらに転んだりする手合は随分といるものだ。中には,処方箋調剤と漢方相談の二枚看板をかけている所もあるようだ。

どうですか。と聞いてみても,この手の店は良い訳がない。大体,どちらの現況も中途半端なのだからうまくいく筈がない。

薬を売る者両眼,薬を用いる者一眼,
薬を服する者無眼

明代の本草書『本草蒙筌』に見られる有名な句である。筆者は,学生時代に,漢方研究会の先輩に聞いた記憶がある。

生薬の判定能力を言ったものである。販売業者あるいは採集業者は十分な鑑定能力を持ち,それを使って治療するものは中途半端な判定能力を持ち,治療を受けるものは判定能力がないというのである。

今も昔も,様相はさして変わってはいない。どころか,全体に一ランクずつ下がってしまっ

---

[5]拳拳服膺　**意味**: 両手で大切にささげ持つように常に心に抱いて決して忘れないこと。肝に銘ずる。**解説**: 「拳拳」は、両手で大切に捧げ持つこと。「服」は身につけること。「膺」は胸のことで、「服膺」は心に刻み込むという意味になる。拳々服膺。 **出典**: 『中庸』

たような気がする。

私の師匠は,漢方の学習を始めると同時に,生薬問屋の押しかけ小僧になり,毎日生薬問屋の倉庫に通い,生薬の選品から,カットを学んだという。おかげで,生薬にはうるさかった。

エキス剤の今日はエキス剤の評価が問題になろう。桂枝の香りのない桂枝湯類何の香りもしない気剤。素人でも判断のできることはいくらもある。

エキス剤をお湯に溶かして臭いを嗅いでいますか。薬物の気味はにおいと関係があるものです。薬を用いる者は両眼といいたいところですが,せめて一眼でも備えていなくてはなりません。

頭寒足熱

ワープロを打ってすぐ出てくるくらい,人口に膾炙[6]した四字成語である。漢方家もよくつかう言葉かもしれない。とはいえ,出典のはっきりしない言葉である。江戸時代前期の俳諧『昆山集』に見られる。頭寒足熱の最も古い文献が漢方どころか医学書ではなく,なんと俳諧というのは驚きだ。

知ったかぶりして,漢方では昔から頭寒足熱といって,などと患者さん相手に法螺を吹いていませんか。ご用心,ご用心。

体内の陽気は上りやすく,陰気は下りやすいので,頭寒足熱によってそれを避けるのが原理であろう。

年が薬

年をとるにしたがって,「濡れ落ち葉」などといわれ家に居場所もなくなり肩身の狭い思いをするようになる。こんなはずではなかったのに,と臍をかんで[7]も時すでに遅しである。

ほんの少しまえまでは,「年が薬」であった。年相応の思慮分別があり,周りもそれを認めていた。

漢方のベテランは,それなりに尊敬されていた。しかし,マニュアル世代の増加のおかげで,「年が薬」ではなくなってきた。手早い回答が求められている。漢方も,マニュアル時代を迎えて,従来とは違った手合いの代物が生まれてきている。少し前にはチョウ某とかいう人のマニュアルが流行ったことがあったが,あれもいつの間にか消えてしまった。

流行り物は廃り物というが,まことにそうだ。

小太郎・漢方研究2009.10月11月号

---

[6] **膾 炙**(かいしゃ) 1. 生肉とあぶった肉。 2. 人々の口に上りもてはやされること。

[7] 臍をかむ **意 味**: どうにもならないことを悔やむ。後悔する。 **読 み**: ほぞをかむ **解 説**: 自分の臍をかもうとしても、口が届かないところから転じたことば。「臍」は、へそのこと。